書評

波照間永吉著

『南島祭祀歌謡の研究』

末次　智

本書の「あとがき」で、著者は次のように述べている。

「日本復帰」をめぐって騒然とする中で、「反復帰」の主張を聞いたことがきっかけであった。その時、幼いながらも、「沖縄自立の思想」のためには沖縄の歴史・文化を、他の何もののためでもなく、沖縄そのもののために知り、体系化するべきだと思ったのである。

著者のこれまでの仕事の集大成で、まさにライフワークの中間発表というべき一冊で本書はあるから、このような仕事への動機を引くのも、それほど的はずれでもないだろう。あるいは、動機は問題ではない、という意見があるかも知れない。たしかにそうかも知れない。だが、日本の南島（琉球弧）を対象にするさい、簡単にそうは言い切れないと、私は思う。少なくとも、そこを対象にする様々な仕事の背後に、倫理的な動機が隠れていることが多く、これが研究対象の選択や方法とも分かちがたく結びついているからである。

総頁数が一一〇〇ページを超える浩瀚な本書の内容を、まず目次で一覧しておくことにする。（ただし、紙幅の都合で章レベルの目次までに留める。以下、本文でも省略する各節のタイトルについては本書を直接ご参照願う。）

第一部　南島の祭祀と歌謡
　第一章　南島八重山の祭祀論研究
　第二章　南島の祭祀と歌謡の現場
　第三章　八重山歌謡の形態
第二部　南島八重山の祭祀と芸能
　序章　八重山の風土と祭祀と芸能
　第一章　八重山の結願祭と芸能
　第二章　八重山の盆行事の芸能
第三部　『おもろさうし』とオモロの研究
　第一章　オモロの記載法
　第二章　オモロと祭祀的世界
　第三章　久高島関係オモロをめぐって

第一部と第二部を見ると、「南島」のなかでもとくに八重山諸島が対象になっていることがわかる。これは、そこが著者の出自だからであり、本書はそこを重要な対象としている。柳田国男を引くまでもなく、自己の出自を対象にすることは、民俗学の一つの理想であった。ただ、本書でそこから導き出されるのは、柳田の民俗学のように「日本」という共同体ではなく、「沖縄」そのものであることはいうまでもない。

本書の全容をここで紹介することは、筆者の手に余ることでもあるし、紙幅も許さないので、筆者の関心に沿って取り上げることにする。順序は前後するが、まず第二部について取り上げたい。ここでは八重山の人々の信仰生活に主眼があり、その中心はオンと呼ばれている。

八重山の村々には、村を守護し、豊穣をもたらす神々を祀る聖所がある。これをオンと称する。オンは沖縄諸島のウタキ（御嶽）に相当し、伝統的な村落生活における宗教的な核をなすものである。

序章では、オンを中心とする村落世界、他界観や神観念とこれにともなう芸能が概括さ

れ、第一章では八重山諸島西表島古見と小浜島の結願祭が取り上げられている。前者では、そこで演じられる狂言の詞章が詳細な語注とともに記載され、後者では祭の過程が民俗誌的に詳述されている。第二章では、八重山諸島の盆行事に特徴的な仮面芸能アンガマについて、特に石垣島登野城のアンガマ問答を中心に、その事例が報告されている。狂言の詞章といい、アンガマ問答といい、祭のなかの言語事象に論述が集中するのは、著者が広い意味での文学（言語表現）を対象とするからである。

そのような著者の本領が発揮されるのは第一部であり、これが本書の中心となっている。第一章では、すでに触れた八重山諸島の祭祀の中心となるオンが、民俗誌的に、歴史的に詳述される。それまでの成果とこれが異なるのは、サブタイトルにあるようにあくまで「祭祀歌謡」研究が前提とされていることである。第二章は、本書のタイトルがここから来ていることからわかるように、本書の核となるべき箇所である。この章は、五年間に渡る琉球弧全域の「神歌」共同研究の成果であり、一九八八年から順次刊行された調査報告書の著者担当部分が元になっている。調査は一貫した理論のもとになされたのであるが、それは玉城政美氏によるものであることが本書において述べられている。第一節の与那国島のマチリ以下、竹富島のタナドゥイ、西表島祖納のシチ、同島古見のプーリィ、小浜島のワンポーリィ、宮古島来間島のヤーマスィプナカ、伊是名島勢理客のイルチャヨーとユーニゲー、のそれぞれの「祭祀と歌謡」の関係が、「『神歌』はどういった場で、どのような人たちによって、どのような方法で歌唱されているか」という立場から詳述される。具体的には、「歌唱主体」、「歌唱法」、「歌謡に伴う儀礼的所作」、「歌形」という主に玉城氏の理論による調査項目が設定され、それぞれについて具体的に記述されている。上記祭祀は、八重山、宮古、沖縄の各諸島、つまり琉球弧を網羅している。これまでの祭祀についての民俗誌を詳細に見たわけではないが、琉球弧における歌謡を中心にしたこのような体系的な実地調査はおそらく初めてのことだと思われる。著者は、中心的な存在として共同研究に関わっていた。また、国際音声記号に基づいて詞章が記録されていることも、理想的な歌謡テキスト作成という点から見逃せない。

その結果が、従来の研究史との整理とともに、著者の視線から同章第八節に簡潔にまとめられている。「神歌」（祭祀歌謡）について、従来の見方をたとえば「神女および神職の占有するもの」としたうえで、これに対する自己の結論を次のように述べている。

特定の神女および神職しか関与しないという限定性は否定され、ある神を祀る祭祀集団の成員の全てが「神歌」の担い手であるということになる。

著者の「神歌」の定義全体は、同節にまとめられているので、参照していただきたいが、右の点についてだけでも、著者の指摘するような先入観に、たとえば私などはたしかにとらえられていたのではないかという気もする。今後の課題として、民間の巫者が関与する呪詞も視野に入れる必要性を説いている。さらに、上記祭祀の報告が「歌謡という生きたモノ」を総合的にとらえようとする著者の方法に説得力を与えている。

第三章は、第二節では竹富島の種子取祭、第四節では八重山諸島で広く見られるユングトゥと呼ばれる短詞形の叙情歌が具体的には取り上げられているが、これらを通して著者の八重山諸島の歌謡研究をより普遍化しよう

と試みる。とくに第一節は、当初商業誌に掲載されたこともあり、注目され、これに触発された上代文学研究者の仕事が現れたりした。祭祀の「場」の広がりとそこでうたわれる歌謡のジャンルが対応していることを論じたものであり、私などのような者も興味深く読ませていただいたが、こうしてまとめられてみると、ある意味で先に触れた琉球弧全域の歌謡調査研究の作業仮説的な意味合いを持つことがわかる。そして、第三節では、その後の共同研究を踏まえ、第二節では従来のジャンル認識のうえに立っていたものが、実際の現場を踏まえることで祭祀の作業仮説がより具体化している「祭祀歌謡」の定義も、実際の場に即したものとなっており、本節は本書の中核をなす箇所だと考えられる。その定義は「ある一つの神祀りの場で、神祀りに関わる者たちによって歌唱される、その祭祀に関係付けられた歌謡」となっている。これつにいて、たしかに「神歌」についての従来の常識的な見方に見直しをはかるものとなっている。ここで著者は、祭祀の現場性を最優先させるために、歴史（通時）的な見方をあえて禁じている。「場」の形成過程や、これと歌謡との結びつきの時間的な変遷について、禁欲的とも言える態度をとるのは、著者が依拠する玉城氏の、言語学を範とする研究方法の特色でもあるのだが、私などはそこに少し物足りなさを感じてしまうのも事実である。だが、これに対し著者は「まず共時的な研究を」と反論するだろうが。あるいは、歴史的な変遷については、私が第一節以下の各論を精読して考察すべきことかも知れない。

さて、第三部には、「この十数年の私の研究の大きな柱」だと自身で述べる『おもろさうし』とそこに収録される歌謡（オモロ）研究についての仕事がまとめられている。第一章に収められる三つの論文は、琉球王府が編纂した祭祀歌謡集『おもろさうし』の各オモロの記載法をめぐる考察である。ごく少数の例外を除き、オモロがうたわれている姿を私たちは知ることができない。よって、文字に記されたオモロ、つまり『おもろさうし』という文字テキストを通して考えていくしかない。そのさい、重要な問題として浮かび上がるのが、詞章の省略記載の問題である。オモロの詞章の一部が省略記載されていることは、ある時期以降の研究者には自明のことであり、多くの場合省略箇所を補って解釈がなされていた。その辺の研究の流れについては、第一節の初めにまとめられている。だが、記載省略された箇所に、二つのレベルがあることに著者は気付く。これをオモロの実際の記載のあり方を通して具体的に確認したのが、第一節である。この元になった論文のすぐあとに発表され、やはり同様の見方を示した島村幸一氏の論文「オモロにおける『対句部』と『反復部』の想定について」（『地域と文化』第三一・三二合併号）とともにこれを、法政大学沖縄文化研究所で開かれていた研究会での成果の一つとして読み、私なども記載の省略をあいまいに考えていたことに気付かされた。つまり、オモロを文字に記録するさい、繰り返される節（旋律のまとまり、「一」「又」記号で示される）において、第一節以下で同一の詞章は、「記載」上省略されているが、省略された箇所を見ると一部に「記載法上の反復」も含まれているのである。これも、オモロをうたわれた歌謡として仮説された玉城氏の歌形論を下敷きにしたことが、このような見方を見いだす契機になっていると、著者はいう。

だが、各オモロについてこの二つのレベルを確定していくことは容易いことではない。これを明らかにすべく書かれたのが、第二節

と第三節である。方法の詳細については本書をご参照願いたいが、これについては著者に「オモロ反復句索引〈末尾句引き〉(試案)」『沖縄芸術の科学』第三号(一九九〇年)と、「オモロ反復句索引(巻別)」『沖縄芸術の科学』第四号(一九九一年)という労作があることを付言するに留める。

さて、第二章はいずれもオモロに表現された内容を通してその世界を論じるもので、第一節ではオモロに王府の神女の憑霊現象を見、第二節では王城である首里城内にある聖地ケオノウチを論じ、第三節ではそこに描かれる人物の装いに王府の人々の美意識を探り、第四節では「袖垂れ」という語のイメージの変遷をたどっている。いずれもオモロの背景に横たわる世界を明らかにしようとする論考である。

第三章は、これも最初は共同研究の成果として公刊されたもので、沖縄本島南部の知念半島の東方海上に浮かび、琉球王府にとって重要な久高島についてのオモロを中心にした考察である。とくに第二節は、著者のオモロ解読方法を具体的に示すものとなっている。

いずれも、沖縄そのものを明らかにするという著者の方法を示すものである。巻末の索引は充実している。しかも、ボリューム、内容を考えると、定価は抑えられている。

(砂子屋書房、一五〇〇〇円)

(すえつぐ・さとし/四條畷学園短期大学)